みんなで

のりこえよう通信

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　校長室から

令和　2　年　7月　29日　　NO.18

俳句の世界

　４年生から６年生まで、７時間目に１５分の時間を設定し、国語の勉強をしています。６年生の授業では、俳句をつくる勉強。なかなか面白いものができつつあって、感動しています。

　いくつか、私の好きな俳句を紹介しますと、坪内捻典さんの句。

　「三月の　甘納豆の　うふふふふ」とか「たんぽぽの　ぽぽのあたりが　火事ですよ」。カバシリ－ズも面白い。(調べてみてください)

　俳句と言えば、正岡子規ですか。確か６年生の道徳の教科書にも載っていたと思います。「柿食えば　鐘が鳴るなり　法隆寺」が有名です。これは、友人の小説家夏目漱石が手紙に「鐘つけば　銀杏散るなり　建長寺」と詠んだので、「それならこっちのほうがええやろう」と送り返した句。

この二人の仲の良さと言ったら‥。また、いつかお話しします。

と、学校だよりでは書きましたが、その続きを少し。

二人の出会いは、お互い22歳の時。二人は今でいう同級生でした。学生時代に意気投合した二人は、漱石が愛媛県松山に英語教師として赴任した時、再会します。この松山での体験をもとに書かれた小説が「坊ちゃん」です。子規は、結核を患い故郷・松山に帰っていたのでした。

「愚陀佛庵」と名付けられた漱石の下宿で共同生活をすることもありました。また、子規の家には、俳句を愛する若者(虚子、碧梧桐、長塚節)たちがわいわい集まってきて、俳句や和歌について口角を飛ばしたのでした。

道徳の教科書の扱いもそうですが、子規の晩節は、結核との壮絶な戦いで、そのなかで詠まれた俳句が特筆され、なんとなく暗いイメ－ジが付きまといます。反対に漱石は、「坊ちゃん」の陽気で明朗な雰囲気や「吾輩は猫である」のようなユ－モラスな作品が多く読まれるので、明るい人物のように思われています。しかし、二人の様々な作品を楽しむと、漱石は暗いし、子規は底抜けに明るい。反対なのです。ちなみに野球発展に貢献した人が入る「殿堂」に子規は入っています。なぜかって。また、いつかお話しします。